

## 日本放射化学会第 66 回討論会 (2022) 印象記

松垣 正吾  
Higaki Shogo

日本放射化学会第 66 回討論会 (2022) は、9 月 15~17 日に東京大学理学部 1 号館及び伊藤謝恩ホールで開催された。本来、2022 年の放射化学討論会は、国際学会 APSORC (7th Asia-Pacific Symposium On RadioChemistry) として福島県郡山市で開催予定だったが、コロナ禍のため 2025 年に延期となったため、急遽国内学会として開催された。APSORC 組織委員長であった高橋嘉夫氏 (東京大学大学院理学系研究科教授・アイソトープ総合センター長) を実行委員長として、化学教室富永研究室・巻出研究室 OB を中心とする実行委員会で開催した。東京大学での開催は、2004 年の第 48 回討論会以来 18 年振り 2 回目のことである。実行委員の 1 人として、3 年振りの対面開催の概要を報告する。

今回の討論会から 2 つの大きな改革が行われた。1 つは、参加登録システムとして confit を採用したことである。実行委員のプログラム編成及び参加者管理負荷がやや低減され、参加費決済もオンラインで可能なことから、当日の現金払いを避けることもでき、現在の状況にマッチしていると言える。もう 1 つは、一般講演でコンビナー制を採用し、セッションに分けて講演者を招待すると共に、一般演題募集を行ったことである。今回の討論会ならではの特別セッションとして、「福島第一原発事故関連研究の最前線」、「核医学の礎を担う放射化学の新展開」、「放射化学と地球化学の接点」、「考古学・文化財・人類学への展開：文理融合領域へのチャレンジ」の 4 つ、そして、今後の討論会でも続いていく基盤セッションとして、「核化学」、「原子核プローブ」、「環境放射能」、「放射性核種の分析化学・放射化分析・

核鑑識」、「教育関連」、「原子力化学・アクチノイド化学」、「生物関連放射化学」、「炉材料・照射効果」、「検出器・計測・イメージング」、「その他 (境界分野への放射化学の新展開など)」の 10 分野であった。これらの結果として、参加者数は 320 名を超え、発表数は口頭 132 件、ポスター 55 件、そして、高校生・高専生のポスター発表 5 件の合計 192 件となり、66 回の歴史を持つ放射化学討論会で、2013 年の国際学会 APSORC13 (金沢) に次ぐ過去 2 番目の発表件数となった。口頭・ポスターとも発表者は会場で講演し、口頭発表のみ Zoom で中継してオンライン聴講を可能にするというハイブリッド型にしたが、参加者のうち約 8 割が 1 日以上来場された。

基調講演として、1 日目に Amir R Jalilian 氏 (IAEA) の「IAEA contribution to radiochemistry for the production of radiopharmaceuticals for clinical use」(写真 1)、2 日目に矢板毅氏 (JAEA) の「放射光 X 線分析から見たアクチノイド化学」、3 日目に大澤



写真 1 Amir R Jalilian 氏 (IAEA) による基調講演 (理学部 1 号館・小柴ホール)

崇人氏 (JAEA) の「リュウグウ試料のミュオン特性 X 線分析」が行われた。放射化学の基盤から、近年短寿命  $\alpha$  線核種による著しい発展がある核医学、そして、生命の根源を探求する分野への発展等、放射化学という学問が幅広いスペクトルを持つことがご理解いただけよう。

2 日目には、伊藤謝恩ホールでパネルディスカッション「放射化学の将来像と若手へのメッセージ」(写真 2) が行われ、篠原厚氏 (前学会長) は今後の放射化学の発展についてのロードマップをご紹介され、中西友子氏 (前々学会長)、三浦勉氏 (学会理事)、鷲山幸信氏 (学会理事)、佐藤志彦氏 (若手の代表として)、秋光信佳氏 (学会外からの視点) から特に放射化学分野の若手へのメッセージや、若手会員確保策についてご講演いただいた。最後に、五十嵐康人学会長から、ベテランから中堅世代に、学問を継続して若手を育てることの大切さについてメッセージがあった。また、受賞講演として、今年度の学会奨励賞を授賞された 3 名による記念講演が行われた。

3 日目には、高校生・高専生のポスター発表として、福島県立磐城高校、福島工業高等専門学校から、福島第一原子力発電所事故後の現地に密着した 5 件の発表があった。発表の質は非常に高く、お昼休みにコアタイムを設定したこともあり、多くの参加者が来場し質問が絶えなかった。予定の時間を大幅に超過したが、研究室に配属される学生よりも更に若い世代をエンカレッジすることができ、非常に良いイベントであった。

若手優秀講演賞として、登録のあった 37 件から 6 件が選出され、閉会式で授与式が行われた。氏名と所属は以下のとおり。巽俊文氏 (東大院薬学系)、庭瀬暁隆氏 (KEK)、小松田沙也加氏 (金沢大院自然科学)、益田遼太郎氏 (阪大院)、蓬田匠氏 (東大院理学系・JAEA)、山口瑛子氏 (東大院理学系・JAEA)。そして、高校生・高専生のポスター発表 5 件すべてに研究奨励賞が学会から授与された。

コロナ禍での対面開催として、東京大学の新型コロナウイルス感染防止対策強化指針を遵守して実施した。指針に従い、検温を毎日行い、日替わりの検温済シールをネームプレートに貼ってもらうことや、各会場には定員数の 50% の収容制限が設けられ、懇親会を開催することが学内外の会場を問わず禁止された。演題数の想定以上の多さによって、講演 15 分



写真 2 パネルディスカッション「放射化学の将来像と若手へのメッセージ」(伊藤謝恩ホール)

+ 質疑 5 分の伝統を崩し 12+3 分にせざるを得なかった。それでも、朝 9 時から夕方遅くまで、ブレイクが少なくパズルのようなプログラム編成となってしまった。更に、各講演の議論やパネルディスカッションが非常に盛り上がり、大幅に予定時間を超過した。2 日目夕方には「飲食を伴わない懇親会」を開催予定であり、準備を行っていたが急遽中止にせざるを得なかった。それでも、久しぶりの対面開催のため、旧交を温める光景があり、新たな人と人との繋がりが生まれ、新たな研究の展開に繋がるのが期待された。オンラインでの開催は参加のハードルが低く便利であるが、これらは対面開催の効果と言えるであろう。次回は 2023 年 9 月 21~23 日に、中島覚先生を実行委員長として広島大学東広島キャンパスで開催予定であり、盛会を期待したい。

最後に少私感述べる。第 48 回討論会は、私の恩師の巻出義紘先生が実行委員会代表を務められ、当時 D3 の私が遅めの学会デビューを果たした会であるため、今回の討論会への思い入れは大変深いものがあった。当時は、「お前にはお昼のゴールデンタイムはまだ早い」と先生に言われ 2 日目の冒頭 9 時半からの講演順だった。今回、僥倖ながら招待講演者の 1 人として招いていただき、また、学位記を (諸事情あって) 専攻の代表として頂戴した小柴ホールで、ゴールデンタイムに講演させていただき感慨深いものがあった。巻出先生は 2021 年夏にご逝去されたが、お元気であれば会場にお越しくださっただろうし、大層喜んでくださったと思う。

(東京大学アイソトープ総合センター、(一社) 日本放射化学会理事)